

〔注6〕これを具体的に応用目標として言い換えると、(1)心窩部の異和感あるいは自発痛、(2)立位時の心窩部圧痛、(3)左側腹筋の緊張または硬結、(4)左肩（心愈、膈愈の部）の凝り痛み、(5)左肩の凝り痛み、(6)四肢の冷感とくに足冷、(7)便秘傾向、(8)頭重頭痛、(9)食欲不振、(10)脈腹ともに虚弱等の諸条件をそなえた病像に適應する。

〔注7〕半夏、桔梗、前胡を主薬として胸中の粘痰を排泄して胸部の拘攣を除く作用がある。和田東郭の説によると呉茱萸を含む処方、すべて左側に苦情が強いことになり、本方も左胸部の拘攣、疼痛を目標に肋間神経痛、狭心症の発作に用いられる。

〔注8〕冷え症にもいろいろな型があり、いちがいにはいえないが、漢方ではまず手足の先が冷えるという人に人参湯を処方する。これは冷え症が胃腸の弱い人に多いので、胃腸薬と強壯を主目的とした処方である。同じ型に属すが、足の関節だけがとくに冷えるという人には延年半夏湯がよく用いられる。

〔注9〕以上の臨床的観察から、延年半夏湯の奏効者の呈する症状をその頻度の順に列記すると次の如くなる。(1)胃症状が自他覚的のいずれかに必ず証明される、(2)左肩こり、(3)足冷、(4)左季肋部ないし左乳房下部の疼痛または疼痛に近い感じ（例えば張ったような感じ）等がもっとも重要な症状であって、その他便秘傾向や、左側に強くあらわれる傾向の腹筋緊張、さらに脈、舌、腹力などより推定して体力的にやや消瘦状態にあることなどが参考症状たりうる。

処方番号：13

処方名：応鐘散（おうしょうさん）

処方構成：

大黄 1、川芎 2

用法・用量：

- （1）散：1 回に頓用する
- （2）湯：上記量を 1 日量

しばり：

体力中等度以上のものの次の諸症

効能・効果：

便秘、便秘に伴うのぼせ・肩こり

原典：東洞先生家塾方

出典：

解説：

別名 芎黄散（きゅうおうさん）

顔面や頭部の疾患に兼用される処方である。

13. 応鐘散

参考文献名	大 黄	川 芎	用法・用量
処方分量集	-	-	以上を粉末として1回に服す
診療の実際	1	2	
診療医典	1	2	
症候別治療	1	2	
処方解説	-	-	
後世要方解説	-	-	
漢方百話	-	-	
応用の実際	-	-	
明解処方	-	-	
漢方処方集	-	-	
漢方医学	1	2	
精撰百八千方	-	-	
古方要方解説	-	-	
成人病の漢方療法	-	-	

【注1】 麦粒腫：便秘の傾向あるときは川芎・大黃を加えるか、芎黃散（応鐘散）を兼用する。本病に限らず、すべての眼疾患には芎黃散がよく兼用される。顔面や頭部の上方部にある病毒を下すために必要なのである。ことに桂枝を加味した処方の場合は川芎・大黃を加味するか、あるいは芎黃散を兼用する。

急性・慢性涙嚢炎，急性・慢性結膜炎，トラコーマ，結膜フリクテン，白内障以上葛根湯と加方で用いられる。

参考：晩成堂散方解 南涯吉益先生口述，羸齋吉益先生口述，木場宏和訳 漢方の臨牀特集号第14巻

東洞先生「大便難く，心下痞し，これを按じて濡にして煩悸する者を治す。また曰く，諸症治し難くして上衝，不大便の者を治すと」

南涯先生「これ血毒ありて上逆する者を治す。その証，頭痛，耳鳴，或は頭痒，或は白屑多く，或は瘡を生じ，或は頭眩，目瞑，或は肩背強り，或は口熱，齒痛，或は血積，不大便の類，諸般上述の毒なり，もし打撲して瘀血ある者は蕎麦を加えて酒にて服す」。

羸齋先生「家方は蕎麦粉少しばかり加う。血滯をもって目的となす。凡そ血氣逆上して上に迫って疼痛，諸腫物に血毒結滯し，或は心下痞す。世にいうところの積気の者および打撲にはみなこの散を用う。その活用広遠なり。凡そ血滯の証をもって（活用の）準治となすべし」。

処方番号：14

処方名：黄連阿膠湯（おうれんあきょうとう）

処方構成：

黄連 3-4、芍薬 2-2.5、黄芩 2、阿膠 3、卵黄 1ケ

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で冷えやすくのぼせ気味で胸苦しく不眠の傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

鼻血、不眠症、かさかさした皮膚のかゆみ

原典：傷寒論

出典：

解説：

瀉心湯の加方である。熱性症候があり、虚して、胸ぐるしく、のぼせ、いらいらして眠ることができなく、各種出血、皮膚の掻痒、下痢、の症状があり、瀉心湯で下しがたいものに用いる。

『方函類聚』に「吐血咳血心煩ニシテ眠ラス五心熱シテ漸々肉脱スル者ヲ治ス又小陰ノ下利膿血、疳瀉下止、痘瘡煩瀉不寝ニ活用シテ特効アリ」とある。

14. 黄連阿膠湯

参考文献名	黄連	芍薬	黄芩	阿膠	卵黄	用法・用量
処方分量集	3	2.5	2	3	1ケ	
診療の実際	3	2.5	2	3	1ケ	
診療医典 注1	3	2.5	2	3	1ケ	
症候別治療	4	2	1	3	1ケ	
処方解説 注2	3	2.5	2	3	1ケ	*1
応用の実際 注3	4	2	2	3	1ケ	
明解処方	3	2.5	2	3	1ケ	
漢方処方集	4	2	2	3	1ケ	*2
漢方入門	4	2	2	3	1/3ケ	
傷寒論入門	4	2	2	3	2ケ	

*1 阿膠、卵黄以外の三味を水600ccに入れ、300ccに煎じ、滓を去り、阿膠を入れて再び火にのせて溶かし、少し冷えてから卵黄1個を入れてかきまぜ、3回に分服する。

*2 水240を以って黄連、黄芩、芍薬、を煮て80に煮つめ滓を去り、阿膠を加えて溶かし、少し冷まして卵黄を加えてかきまぜる。3回に分服。

〔注1〕 老人または病後の患者の不眠、諸種の出血、下痢(粘血便を下すもの)、皮膚疾患に用いられる。皮膚病に用いる目標は、発疹が主として顔面にみられ、隆起があまり目立たないほど低く、指頭でなでるとざらざらして、少し赤味を帯びて乾燥し、かゆみは少なく、糠のような落屑があり、風にあたり、日光にあたるとわるくなる傾向がある。

〔注2〕 血煩により心中煩して眠ることを得ず、不眠、煩燥、顔面紅潮、興奮、心悸亢進、頭重、のぼせ、胸苦しく熱感等を訴え、虚候を帯びて瀉心湯で下しがたいものを目標とする。

勿誤方函口訣には、「此方ハ柯韻伯ノ所謂少陰ノ瀉心湯ニテ、病陰分ニ陥ツテ上熱猶ホ去ラズ、心煩或ハ虚躁スルモノヲ治ス。故ニ吐血、咯血、心煩シテ眠ラズ、五心熱シテ漸々肉脱スル者、凡ソ諸病日久シテ、熱気血分ニ浸潤シテ諸症ヲナス者、毒痢腹痛膿血止マズ、口舌乾ク者等ヲ治シテ驗アリ。又少陰ノ下利、膿血ニ用ルコトモアリ、併シ桃花湯トハ上下ノ弁別アリ、又疴瀉止マザル者ト、痘瘡煩渴シテ寝ザル者ニ活シテ特効アリ」とある。

〔注3〕 心悸亢進があり、胸ぐるしく、眠れないものが目標である。こういう場合には、つぎのようないろいろな症状がおこるときに用いられる。(1)吐血や咯血がある。(2)膿血便を下痢す。(3)頭部、顔面の疔(化膿性腫物)がひどく痛む。(4)尿が赤くにこり、あるいは淋瀝して尿利減少する。

処方番号：15

処方名：黄連解毒湯（おうれんげどくとう）

処方構成：

黄連 1.5-2、黄芩 3、黄柏 1.5-3、山梔子 2-3

用法・用量：

（1）散：1回 1.5-2g 1日3回

（2）湯

しばり：

体力中等度以上で、のぼせがみで顔色赤く、いらいらして落ち着かない傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

鼻出血、不眠症、神経症、胃炎、二日酔、血の道症、めまい、動悸、更年期障害、皮膚搔痒症、口内炎

原典：外台秘要方

出典：

解説：

漢方の病理の一つに、病邪の種類による分類があり、熱邪とその位置による外感熱邪分類がある。外感熱邪分類において、血分に熱が入ってしまったときに、その熱を冷やすことを「解毒（涼血）」と言う。血分に熱邪が入ると、熱感・口渴・皮膚乾燥・のぼせのような熱症状や吐血・喀血・鼻血・血尿・下血のような出血症状、イライラ・不眠・不安感のような精神症状が出てくる。黄連解毒湯は苦寒薬で構成されている。黄連は心と脾、黄芩は肺と大腸・小腸、黄柏は腎と膀胱、山梔子は肝と心包・三焦の熱を解する事から体の全ての熱を冷ますとされている。

15. 黄連解毒湯

参考文献名		黄連	黄柏	黄芩	山梔子
診療医典	注1	1.5	1.5	3	2
処方解説	注2	1.5	1.5	3	2
治療の実際	注3	1.5	3	3	3
診療の実際	注4	1.5	1.5	3	2
処方集	注5	1.5	3	3	3
民間薬百科	注6	1.5	1.5	3	2
明解処方	注7	1.5	1.5	3	2(8)
応用の実際	注8	2	2	3	2
処方分量集		1.5	1.5	3	2
漢方医学		2	1.5	3	2

〔注1〕 本方は、陽実証の薬方で皆消炎の剤をもつて成り立ち、充血を去り、精神の不安を除く効がある。また諸熱性病の経過中に用いて、日数を経過した残余余熱を解する。患者は炎症、充血による精神不安、煩悶を訴え、尿が赤く、あるいは諸出血を来とし、脈は沈んで力があり、心下部が痞えて抵抗がある。

なお、諸熱性病、咯血、吐血、衄血、下血、脳充血、ノイローゼ、精神病、血尿、皮膚癢痒症などにも応用。

〔注2〕 三焦(上中下の三焦)の実熱によって起こる炎症と充血をともなった諸症を治するのが目標である。小柴胡湯類の半外半裏の熱でもない一種特異の遷延熱を解するものである。実証で腹に力があり、脈も充分力があって、熱はあるが沈の傾向を帯びたものである。

一般雑病のうち炎症と充血のため顔色赤く上衝し、不安焦躁・心悸亢進の気味があり、出血の傾向を有するものを参考として用いる。本方を不眠症に用いるときは、頭がさえてなかなか眠れない。気分が落ちつかず、つまらないことが気にかかる、いらいらする、のぼせるというようなことを目標にする。高血圧症や更年期障害のときの不眠にこの症がある。

また実熱を治する処方で、熱性病の急性期に用いるが、実熱の症の慢性化した雑病にも用いられる。

本方は主として吐血、咯血、衄血、下血、血尿、麻疹、痘瘡、皮膚病、皮膚癢痒症、蕁麻疹、諸熱性病の残余余熱に用いられ、また狂躁症(喜笑やまざる症)、血の道症、めまい、心悸亢進症、ノイローゼ、精神病、脳溢血、高血圧症、酒渣鼻、黒皮症等に広く応用される。

〔注3〕 (1)不眠症：頭がさえて仲々ねむれない。気分が落ちつかず、つまらないことが気にかかる、いらいらする、のぼせる等の傾向の不眠に用いる。

(2)高血圧症：のぼせ、顔面潮紅、不眠、気分の不安定などの愁訴のある高血圧患者に用いる。婦人の更年期障害に伴う高血圧には、本方を用いる証が多い。もし便秘するようであれば、これに大黄を加える。黄連解毒湯証患者の腹部には、胸脇苦満や腹部膨満等がなく、心下がつかえるという程度の特徴しかないものが多い。(3)癢痒症、発疹、変色のある皮膚：のぼせ、患部の灼熱感あるもので、患部が乾燥していないもの。

〔注4〕 は 〔注1〕 と同文

〔注5〕 大熱煩躁、乾嘔口渴、喘満を治すのが目標である。なお急性熱病、吐血、咯血、鼻血、痔出血にも応用される。

〔注6〕 血色がよくて、赤みを帯び、のぼせ気味。気分がいらつき、興奮の傾向があり、安眠できない者。からだはがっちりしている者を目標とする。

吐血、衄血(鼻血)、咯血、子宮出血、痔出血などの出血、または出血の傾向、脳出血、高血圧症、不眠症、神経症、血の道、胃炎、胃潰瘍、黒皮症、肝斑(しみ)、酒渣鼻(赤鼻)などに用いる。

〔注7〕 ①精神不安 ②上半身の充血(主)と下半身の貧血症状(従) ③舌乾燥 ④口渴 ⑤高血圧を必須目標に、また① 薬物中毒 ②酒渣鼻 ③不眠 ④吐血、咯血などの出血症状 ⑤腹診に異常なし ⑥生理不順などを確認目標とする。

二日酔、火傷による精神異状、酒渣鼻、薬物中毒、潰瘍性胃腸疾患による出血、眼の洗滌剤、乾性皮膚病、(もし乾燥著るしいときは温清飲)などに用いる。

〔注8〕 体格はがっちりして体質が頑丈な人、もしくは体格、体質が中ぐらいの人が、のぼせ、上逆感などの上衝の傾向があって、瀉心湯の証(① 気分がいらいらして落ちつかず、精神不安や不眠があって、みぞおちに食物が痞え、腹診すると心下濡で、上腹部が表面は柔軟であるが底の方に抵抗がある。 ②上腹部が痛み、心下部一帯が膨満して固く張り、圧痛がある。 ③頭痛、耳鳴、血圧亢進がある。 ④吐血、衄血、下血、潜出血などの出血)に準じ、しかも便秘の傾向がなく、さらに心煩、心中懊憹、煩熱、あるいは黄疸などがある場合を目標とする。

諸種の出血(咯血、吐血、衄血、子宮出血、下血、痔出血、脳溢血など)に用いて気分をしずめ、不安を去り、出血を止める。その他高血圧症、不眠症、神経症、精神症、血の道、火傷、皮膚病、胃潰瘍、胃炎、胃酸過多症、口腔・食道の痛み、黄疸、酒渣鼻、肝斑等に応用される。

処方番号：16

処方名：黄連湯（おうれんとう）

処方構成：

黄連 3、甘草 3、乾姜 1-3、人参 2-3、桂枝 3、大棗 3、半夏 5-6

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で胃部の停滞感や重圧感、食欲不振があり、ときにはきけや嘔吐のあるものの次の諸症

効能・効果：

胃痛、急性胃炎、二日酔い、口内炎

原典：傷寒論

出典：

解説：

出典である『傷寒論』には「胸中に熱有り、胃中に邪気有り、腹中痛み、嘔吐せんと欲す」と記されている。本方は半夏瀉心湯の黄芩を桂枝に変えた処方であるから、上衝（のぼせ）があることが重要である。そこで、『医聖方格』には「熱病、心下痞し、胸中煩熱し、心腹痛みて嘔吐せんと欲し、其の人、頭に汗出て、心下悸して臥すこと能わざる者は黄連湯之を主る」と気の上衝が明記されている。すなわち、気の上衝と悪心（むかつき）、嘔吐を示す病態が適応となる。

『漢方概論』には胃腸炎の他に、歯痛、口内炎、口角炎、二日酔い、神経症などで、「冷えのぼせを伴う者」に応用することが記されており、臨床上参考となる記述である。

16. 黄連湯

参考文献名		黄連	甘草	乾姜	人参	桂枝	大棗	半夏
診療医典	注1	3	3	3	3	3	3	6
処方解説	注2	3	3	3	3	3	3	6
治療の実際	注3	3	3	3	3	3	3	5
応用の実際	注4	3	3	3	2	3	3	5
診療の実際	注5	3	3	3	3	3	3	6
処方集	注6	3	3	3	2	3	3	8
民間薬百科	注7	3	3	3	3	3	3	6
明解処方	注8	3	3	3	2	3	3	8(25)
処方分量集		3	3	3	3	3	3	6

【注1】 本方は半夏瀉心湯に似ていて、腹痛のあるものに用いる。

心下痞満、圧重感、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、口臭などで、しばしば舌に黄色苔がみられる。便通は不定で、下痢することもあり、便秘することもある。

なお胃炎、胃腸炎にも応用される。

【注2】 上熱中寒といって、胸部に熱があり、胃に寒があり、その冷えのために腹痛と嘔吐が起こる。一般には次のような諸徴候を呈するのでこれを参考とする。すなわち、胃部に停滞圧重感があり、悪心、嘔吐、腹痛、食欲不振、口臭、舌苔など急性の胃炎に現われる症候複合を引き起こす。便通は不定で便秘、あるいは下痢し、心下部は抵抗を増し、上腹部または臍傍に痞え疼痛を現わす。舌苔は黄白色で湿潤し、前の方は薄く後ろの方は厚い。脈は概して寸脈浮で、関尺は沈弱である。

上部胸中に熱があり、中部胃中に寒があつて、腹痛と嘔吐を起こすものに用いる。本方は主として急性胃炎、胆石症、蛔虫症、急性虫垂炎の初期、婦人血の道の腹痛嘔吐、二日酔、その嘔吐腹痛はなくとも上方胸部の熱と中部胃の寒による口内炎、口角炎、神経症。また火を見て起こる癲癇、歯痛などにも応用される。

【注3】 半夏瀉心湯の黄芩の代りに桂枝を入れたもので、腹症は半夏瀉心湯と同じく心下痞があり、腹痛、嘔吐を目標として用いる。そこで胃炎、胃潰瘍などに用いる機会がある。舌には厚い白苔の現われることが多い。

【注4】 目標：腹痛があつて、悪心・嘔吐のおこるものである。このとき胃部の停滞感や重くするしい感じ、食欲不振、口臭、舌苔などがある。この舌苔は、舌の奥の方ほど厚く、少し黄色みをおびて、湿っていて滑かである。また心悸亢進がおこって胸ぐるしく、上衝してつき上がる感じがある。便通は、便秘のことも下痢することもある。腹部では、みぞおちに抵抗があり、上腹部に圧痛をみとめることがある。

感冒や熱病に伴う胃炎、食あたりによる胃腸カタル、胃酸過多症などに応用される。

【注5】 胃部停滞圧重感、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、口臭、舌苔等で、すなわち通常は急性胃カタルに屢々現われる症候複合である。便通は不定で便秘、あるいは下痢、心下部は抵抗を増し、上腹部または臍傍に屢々圧痛を示す。舌苔は黄白色で湿潤し、前部には薄く後部に厚く現われる。

感冒または熱病に伴う胃炎、食傷による胃腸カタル、過酸症で腹痛の強い者等である。本方の症で便秘する者には大黃を加えて用い、水瀉性下痢を伴う者には茯苓を加えて用いる。

【注6】 目標：胸熱胃寒、腹痛嘔吐を目標とする。

急性胃カタル、急性胃腸カタル、蛔虫、胃酸過多症、胆石症に応用される。

〔注7〕 胃がつかえて重く、食欲がなくて、吐いたり、吐きけがあったり、腹が痛んだりする。便通は下痢することもあれば、便秘することもある。舌に白いこけがつくことがあり、口臭のあることもある。

胃炎、胃腸炎、胃酸過多症に応用される。

〔注8〕 ①胃痛、②嘔吐感 ③心煩を必須目標に、また①不眠 ②軟便 ③頭痛 ④腹痛を確認目標とする。

食当りによる胃痛頓服として繁用する。急性胃炎、二日酔、蛔虫による腹痛等に応用される。

処方番号：17 処方名：乙字湯（おつじとう）

処方構成：

当帰 4-6、柴胡 4-6、黄芩 3、甘草 2-3、升麻 1-2、大黃 0.5-1.5

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはそれ以上で大便がかたく、便秘傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

痔核（いぼ痔）、きれ痔、便秘、軽度の脱肛

原典：叢桂亭医事小言

出典：勿誤薬室方函口訣

解説：

この薬方は浅田宗伯の改良方であるが、原南陽の創方は小柴胡湯の変方で、柴胡、黄芩、大棗、生姜、甘草、升麻、大黃からなり改良方は大棗、生姜を去り当帰を加味している。用法は通常痔核で痛むものを目標に用いるが、衰弱していなければ虚実にとらわれることなく、痔疾患で病状のそれほどひどくないものに用いる。

『方函類聚』に「諸痔疾脱肛痛楚甚ク或ハ前陰痒痛心氣不足ノ者ヲ治ス升麻ハ犀角ノ代用ニシテ止血ノ効アリ此方甘草ヲ多量ニセサレハ効ナシ」とある。

17. 乙字湯

参考文献名	生薬名	当	柴	黄	甘	升	大	用法・用量
		帰	胡	芩	草	麻	黄	
処方分量集		6	5	3	2	1.5	0	
診療の実際		6	5	3	2	1.5	1	
診療医典	注1	6	5	3	2	1.5	1	
症候別治療		6	5	3	2	1.5	0.5	
処方解説	注2	6	5	3	3	1	1	
後世要方解説		6	5	3	2	1.0	0.5	*
応用の実際	注3	4	4	3	2	1.5	1	
明解処方		4	4	3	1.5	1.5	1	
基礎と診療		6	4	3	3	1.5	1~3	
漢方処方集		5	4	3	3	1.5	1~3	
実用漢方療法		6	5	3	2	1.5	1	
診断と治療の実際		6	6	4	3	2	1	

* 大黃は便通のいかんにより去加する。

〔注1〕 いろいろの痔の疾患に用いられる。とくに病状がそれほど激しくないもので、虚実何れにも偏しない、一般的病状を目標として使われる。

〔注2〕 諸痔疾患で病状がそれほど激しくないものである。虚実に偏しない一般的な病状を目標とする。

叢桂亭医事小言に「痔疾、脱肛、痛楚、或ハ下血腸風、或ハ前陰痒痛スルモノヲ治ス。諸瘡疥誤ッテ枯薬(乾かす薬)ニテ洗傳シ(洗ったり塗ったり)、頓ニ癒エ、後チ上逆、鬱冒、氣癖(神経症)如ク、緘憂細慮(細かいことを気に病む)、或ハ心気定マラザル如キ者、並ビニ之ヲ主トス」とあり、勿誤方函口訣には、「此方ハ原南陽ノ経験ニテ、諸痔疾、脱肛、痛楚甚シク、或ハ前陰痒痛、心気不定ノ者ヲ治ス。南陽ハ柴胡、升麻ヲ升提(ひきあげる)ノ意ニ用イタレドモ、ヤハリ湿熱清解ノ功ニ取ルガヨシ、其内升麻ハ古ヨリ犀角ノ代用ニシテ、止血ノ効アリ。此方甘草ヲ多量ニセザレバ効ナシ」といっている。

〔注3〕 痔痛、痔出血、脱肛、あるいは陰部の痒痒や疼痛に用いる。この場合、出血は多くはなく、患者は体力が中ぐらいで、衰弱していないものである。

処方番号：17A

処方名：乙字湯去大黃（おつじとうきょだいおう）

処方構成：

当帰 4-6、柴胡 4-6、黄芩 3、甘草 2-3、升麻 1-2

用法・用量：

湯

しぱり：

体力中等度かやや虚弱なものの次の諸症

効能・効果：

痔核（いぼ痔）、きれ痔、軽度の脱肛

原典：叢桂亭医事小言

出典：勿誤薬室方函口訣

解説：

この薬方は浅田宗伯の改良方であるが、原南陽の創方は小柴胡湯の変方で、柴胡、黄芩、大棗、生姜、甘草、升麻、大黃からなり改良方は大棗、生姜を去り当帰を加味している。用法は通常痔核で痛むものを目標に用いるが、衰弱していなければ虚実にそれほどとらわれることなく、痔疾患で病状のそれほどひどくないものに用いる。

『方函類聚』に「諸痔疾脱肛痛楚甚ク或ハ前陰痒痛心気不足ノ者ヲ治ス升麻ハ犀角ノ代用ニシテ止血ノ効アリ此方甘草ヲ多量ニセサレハ効ナシ」とある。

17A. 乙字湯去大黃

参考文献名	当 帰	柴 胡	黄 芩	甘 草	升 麻
処方分量集	6	5	3	2	1.5
診療の実際	6	5	3	2	1.5
診療医典 注1	6	5	3	2	1.5
症候別治療	6	5	3	2	1.5
処方解説 注2	6	5	3	3	1
後世要方解説	6	5	3	2	1
応用の実際 注3	4	4	3	2	1.5
明解処方	4	4	3	1.5	1.5
基礎と診療	6	4	3	3	1.5
漢方処方集	5	4	3	3	1.5
実用漢方療法	6	5	3	2	1.5
診断と診療の実際	6	6	4	3	2

注1・注2・注3については乙字湯のものを参照のこと

処方番号：18

処方名：解急蜀椒湯（かいきゅうしょくしょうとう）

処方構成：

蜀椒 1-2、加エブシ 0.5-1、粳米 8、乾姜 1.5-4、半夏 4-8、大棗 3、甘草 1-2、人参 2-3、膠飴 20

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以下から虚弱で腹部が冷えて、上腹部が痛み、あるいは腹が張って腹鳴し、ときに嘔吐を伴うものの次の諸症

効能・効果：

冷え腹、急性胃腸炎、腹部の痙攣

原典：外台秘要方

出典：勿誤薬室方函

解説：

『浅田方函口訣』に「寒疝の気、刺すが如く、臍をめぐり腹中ことごとく痛み、自汗出で絶せんと欲するを治す。」と主治が書かれている。冷え性で腹部ガス貯留が著しく、強度の腹痛を訴えるのを目標にしている。イレウス、過敏性腸症候群等に応用の機会が多い。

子宮内膜症で強度の腹痛を訴える患者で腹部ガス貯留の著しかった例に著効を認めた経験もある。強度の腹部痛とガス貯留を目標に用いる。

18.解急蜀椒湯

参考文献名	蜀椒	附子	炮附子	粳米	玄米	乾姜	半夏	大棗	甘草	人参	膠飴	用法・用量
漢方診療医典	2	0.5		8		2	5	3	2	3	20	
漢方処方応用の実際 注1	2	0.5		8		2	5	3	2	3	20	*1
金匱要略入門 注2	二百枚	一枚		一升		半両	十二枚	二十枚	一両			*2
新版漢方医学	2	0.5		8		2	5	3	2	3	20	
症候による漢方治療の実際	2	0.6		8		2	4	3	2	3		
漢方と民間薬百科 注3	2	0.5		8		2	5	3	2	3	20	
経験・漢方処方分量集	2	1		8		2	5	3	2	3		
改訂新版漢方処方集 注4	1		0.3 (又は白川附子1)		7	4	8	3	1	2		
成人病の漢方療法 注5	2	1		8		2	5	3	2	3	20	
1000万人の漢方診断と治療の実際 注6	2	1		8		2	5	3	2	3	20	

*1 もと人参、膠飴なし

*2 右七味を切り、水七升を以て煮て三升をとり、澄清し一升を熱服せよ。

注1

- ・腹部が冷えて、上腹部が激しく痛み、あるいは腹が張って腹部雷鳴がおこり、嘔吐することもある。
- ・回虫症の腹痛にも、本方の適応が多い。
- ・附子粳米湯と大建中湯の合方で、どちらも裏に寒があって、身体内部が冷えている場合。
- ・腹痛は強く、時には上の方へつき上がり、冷汗を流し、手足が冷えて命旦夕に迫ったような、危急の形状をなすもの。(梧竹楼方函口訣)
- ・急性胃腸カタル、冷え腹、鼓腸、回虫症

注2

- ・寒疝気にて心痛は刺す如く、臍を繞って腹中は尽く痛み、自汗いで絶せんと欲するを主る。

注3

- ・腸の蠕動不安があって、腹痛が激しく、腹が冷えるものによい。
- ・腸の蠕動運動が亢進し、腹痛を訴え、腹鳴りがあり、腹が冷える。
- ・いったいに腹に弾力がなく、場合によって、腸の動くのが外から見えるというようなもの。
- ・腸の蠕動不穏症、腸管の狭窄や癒着

注4

- ・心腹劇痛、嘔吐、腹鳴
- ・寒疝、腹痛、イレウス

注5

- ・胃潰瘍と十二指腸潰瘍：腸の蠕動運動が亢進して、胃腸の痛みが激しく腹鳴するものに用いる。腹に弾力がなく、場合によっては腸の蠕動が望見できる。
- ・疝痛：腹中が冷え、腹がゴロゴロなって刺すように痛むものに用いる。症状により、大建中湯を合方した解急蜀椒湯を用いる。(附子粳米湯の項)

注6

- ・胃潰瘍と十二指腸潰瘍：腸の蠕動運動が亢進して、胃腸の痛みが激しく腹鳴するものに用いる。腹に弾力がなく、場合によっては腸の蠕動が望見できる。
- ・疝痛：腹中が冷え、腹がゴロゴロなって刺すように痛むものに用いる。症状により、大建中湯を合方した解急蜀椒湯を用いる。(附子粳米湯の項)
- ・胃痙攣、腸疝痛、腹膜炎

処方番号：19

処方名：加減涼隔散（回春）（かげんりょうかくさん・かいしゅん）

処方構成：

連翹 2-3、黄芩 2-3、山梔子 1.5-3、桔梗 2-3、黄連 1-2、薄荷 1-2、当帰 2-4、地黄 2-4、枳実 1-3、芍薬 2-4、甘草 1-1.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で胃腸の調子がすぐれないものの次の諸症

効能・効果：

口内炎、口腔の炎症

原典：万病回春

出典：

解説：

三焦の火盛んにして口舌に瘡を生じるを治す。『万病回春』には涼隔散加減とある。

涼隔散加減に同じ。『万病回春』に「三焦の火盛んにして口舌に瘡を生じるを治す」とあるように、口内炎・口唇の病・口舌が肥大し痛み破れ瘡を生じるものに用いられる。すなわち、血と津液を補い瘀血と湿邪と熱を除き、肝胆と三焦を調えて、血と氣の行りを良くし発散し、上逆した氣を降ろし解熱する方意を持つ。ベーチェット病にも応用される。

19.加減涼膈散(回春)

参考文献名	連翹	黄芩	山 梔 子 *	桔 梗	黄 連	薄 荷 葉	当 歸	生 地 黄	地 黄	枳 殼	枳 実	芍 薬	甘 草	用法・用量
漢方診療医典	3	3	3	3	1	1	4	3.5	1	4	1			
症候による漢方治療の実際 注1	3	3	3	3	1	1	4	4		2	4	2		
漢方と民間薬百科 注2	3	3	3	3	1	1	3	3		1	3	1		
経験・漢方処方分量集	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
改訂新版漢方処方集 注3	3	3	2	3	2		2	3	3 (乾又は 熟地黄)	3	3	2		
漢方薬入門 注4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
続漢方あれこれ 注5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
現代漢方入門 注6	3	3	3	3	1	1	4	3.5	1	4	1			
現代漢方入門	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
1000万人の漢方診断と治療の実際 注7	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		

* 山梔、山梔子、梔子は山梔子にまとめた

注1

・カタル性の口内炎で、口腔粘膜が一体に発赤腫脹して疼痛を訴え、僅かの刺激で出血し、よだれが多く出るようになったものには、三黄瀉心湯、黄連解毒湯、加減涼膈散のような黄連、梔子、黄ゴンなどの入った処方を用いる。

・口舌が痛み、或いはできものなどがあり、或いはただれなどする類は、みな用いてよい(涼膈散)。もし虚証で、便秘せず、腹にも力がないようであれば、加減涼膈散を用いる。(有持桂里)

注2

・口内炎:急性にきて、炎症が激しく、痛みのひどいものによい。これにも三豆根3gを加えるとよい。口内の炎症がひどくて食事もとれず、ものをいうのものにもよい。

・口内に熱をもち、口腔粘膜、舌などが赤くはれて痛むもの。

・口内炎、舌炎

注3

・口内炎、舌炎

注4

・口内炎:実証で、口腔粘膜が糜爛し、舌が腫れ食物を摂るのが不自由で便秘気味の人には涼膈散、涼膈散の証で便秘がないときには加減涼膈散。

注5

・口内炎:炎症がひどく、ノドまで痛んできて食事ができないとき。

・口の中のただれ

注6

・口内炎:涼膈散の証(実証で、口腔粘膜の発赤腫脹がひどく、舌がはれ、眼に充血があり、脈腹ともに力があって便秘するもの)で、便秘しないもの。

・口内炎、舌炎

注7

・口内炎、舌炎

処方番号：19A

処方名：加減涼隔散（浅田）（かげんりょうかくさん・あさだ）

処方構成：

連翹 2-3、黄芩 2-3、山梔子 1.5-3、桔梗 2-3、黄连 1-2、薄荷 1-2、当归 2-4、地黄 2-4、枳実 1-3、芍薬 2-4、甘草 1-1.5、大黄 1、石膏 4

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上で胃腸の調子がすぐれないものの次の諸症

効能・効果：

口内炎、口腔の炎症

原典：万病回春

出典：勿誤薬室方函

解説：

『勿誤薬室方函口訣』には「此の方は、涼隔散よりは用いやすく、口舌を治すのみならず、諸病に活用すべし。古人は涼隔散を調胃承氣の變方とすれども、其方意は膈熱を主として瀉心の諸類に近し。…」とあり、口腔内諸疾患も膈熱によって起こる諸症状に含まれ、涼隔散は膈熱を取り去ることによりこれらの症状を改善させることを示唆していると思われる。